

大川嗣雄（横浜市立大学リハビリテーション科科长）・他 著

車いす

加倉井周一（帝京大学助教授）

車いすは国際的な障害者用建築基準のシンボルマークに象徴されるように、下肢機能障害者・老人などの移動手段として我が国の社会にすっかり定着しているだけでなく、国が福祉サイドで支給している補装具の中でも最も数多い種目の一つであり、代表的なリハビリテーション機器である。

このように良く知られているにもかかわらず、車いすの具体的な事項—例えばどのような患者にどのような種類の車いすを処方すべきか？・自家用車に搭載できる車いすのサイズは？・車いすの操作訓練方法・更には車いすの手入れなど—になると、残念ながら一部の専門家のみにまかされてしまう傾向にあることは否定できない。つまり医療スタッフの車いすに対する実際的な知識は意外に少ないのが実状である。

今回、横浜市大リハビリテーション科の大川嗣雄教授を中心と

する横浜市大グループと長年の車いすに関する研究で定評のある神奈川県総合リハセンター・リハ工学科の方々が共同執筆された「車いす」は、この領域での我が国初めての書物であり、急速な高齢化社会を迎えようとしている今日において、その刊行の意義は極めて大きいものといえよう。本書はB5変形版で索引もふくめて本文147ページというコンパクトな書物ではあるが、その内容は①我が国における車いすの歴史（なかなか労作である）②車いすの種類③基本構造④処方⑤基本訓練⑥電動車いすと自動車⑦車いすと環境⑧車いすの科学⑨資料から構成されており、豊富な写真と図表のせいもあるが非常に読みやすい点に特徴がある。まえがきによれば、本書は専門家から障害者までを対象としているとのことであるが、最も必要な読者は、患者に対して「車いす」とだけ処方をし

てあとはセラピストや製作者にまかせりの医師に是非すすめたい（恐らく執筆者もそのような思いをもっているものと推察している）書物である。

強いて本書に注文をつけるとするならば、①車いすと座—とりわけ重度障害者に対する seating system の説明がやや不足していること②もっと処方ページを費やしてもよかったのでは—特殊な患者—例えば脊髄損傷者に対するクッションなど③車いすとスポーツの章が加わるとよいなどが考えられ、将来改版の機会があれば是非取り上げて戴きたいものである。

従来車いすに関するまとまった書物は Kamenetz の “Wheelchair Book” (Thomas, 1969) しかなかったが、本書はオリジナルな日本語版として多くの方々に是非利用していただきたいものである。

(B5横判, 頁158, 図89, 写真185, 1987, ¥3,700, 〒300, 医学書院刊)

ニュース

脳卒中の体験生かしてリハビリ医師が出版

〈灘区の山本さん〉

脳卒中で倒れた経験を生かしてリハビリ専門医院を開業している灘区六甲町3、山本リハビリ整形外科クリニック院長、山本剛さん（61）がこのほど、福祉先進国のノルウェー、スウェーデン、デンマークの北欧三国を訪れた時の思い出や、リハビリ医療の話を「ドクター赤ひげ北欧車椅子の旅」と題した本にまとめ、出版した。

本には、停留所を道路より高くして車いすのままバスに乗ることができるようにしていたり、車いす専用タクシーなど、障害者のために様々な配慮をしている北欧の福祉施設の充実ぶりや、リハビリ医療に対する日本の医師たちの関心の低さなどを指摘している。

B6判, 254ページ, 1,200円。青山書房(03・295・5248)発売。

〔毎日新聞〕明石・三木・三田版, 1987.3.6.)